



Short ショートコメント

★★★

ドライブ・クレイジー 台北・ミッション (原題 Weekend in Taipei)

2024年／フランス・台湾・アメリカ映画

配給：アット エンタテインメント／100分

2025（令和7）年8/2、11/1鑑賞 オンライン試写/テアトル梅田

Data

2025-70

2025-104

監督・脚本：ジョージ・ホアン

製作・脚本：リュック・ベッソン

出演：ルーク・エヴァンス／サン・カン／ゲイ・ルンメイ／ワイアット・ヤング

みどころ

ジョージ・ホアン監督の名前は知らないが、リュック・ベッソンの製作・脚本で、台湾の美女女優ゲイ・ルンメイが美しき天才ドライバー役と聞けば、こりや必見！また、タイトルだけで本作が狙うエンタメ性も丸わかりだ。

貴重なタレ込み情報を得た米国の麻薬取締局（DEA）の捜査官ジョンは、ジョージ・ワシントンと称して台北へ！麻薬密売で億万長者となったクワンとの対決は如何に？そのきっかけとなった極秘情報の提供者は一体誰？

他方、クワンの一人息子がやけに反抗的なのは一体なぜ？『薄氷の殺人』（14年）で印象的な演技を見せた女優ゲイ・ルンメイが母親役を演じていることにビックリだが、アクションとロマンスの絶妙な融合に拍手！

———— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * —————

◆本作の“売り”は、「台湾興行成績第1位！※初週」「美しき天才ドライバー×麻薬捜査官！」。しかも監督・脚本のジョージ・ホアンは知らないが、製作・脚本がリュック・ベッソンと聞けば、こりや必見！もっとも、これには、「※初週」の注がついているから、本作は出足だけ快調だったの？

そうかもしれないが、フランスの新聞では「アクションとロマンスの絶妙な融合」（Le Point）、「アクション・エンタメ映画として素晴らしい出来栄え」（Le Parisien）、「トランスポーターなどリュックベッソンのアクション映画が復活」（Dernières Nouvelles d'Alsace）、「ルーク・エヴァンスとゲイ・ルンメイの息の合った掛け合いが、ベッソンの手法をさらに進化させた」（Le Dauphiné Libéré）等と宣伝されているから、やっぱり必見！

◆ “美しき天才ドライバーって一体ナニ？” カーアクションの名作は多いし、リュック・ベッソン製作・脚本・監督作品は特にそうだが、『トランスポーター』（02年）（『シネマ2』188頁）シリーズをはじめ、カーアクションの主人公（ドライバー）は男に決まっている。

しかるところ、本作で「美しき天才ドライバー」役を演じるのは、中国映画『薄氷の殺

人』(14年)『シネマ44』283頁)で強烈な印象を残した台湾の美女女優、グイ・ルンメイ。本作ではいきなりブランド服に身を包んだジョーイ(グイ・ルンメイ)が車の展示場に現れ、真っ赤なフィアットに試乗するや、あっと驚く天才ドライバーぶりを見せるのでそれに注目!こんな超暴走運転は映画の中だけにしたいものだが、まさに、これぞ快感!

◆本作では導入部で、台北での潜入捜査に従事している麻薬取締局(DEA)の捜査官ジョン(ルーク・エヴァンス)が厨房で働いている最中に突然襲われ、大奮闘するシークエンスが登場する。ジャッキー・チェンばり(?)の彼のアクションは興味深いが、潜入捜査に失敗した彼は、週末の休暇を命じられてしまったから、アレレ。

『007シリーズ』の主役ジェームズ・ボンドなら、この休暇を利用して美女とシケこむところだが、ジョンは何と“ジョージ・ワシントン”なる偽造パスポートで、台北に再度乗り込むことに。それは、DEAのもとに、億万長者クワン(サン・カン)の極秘データを確保したとの極秘メールが届いたためだが、その発信者は一体ダレ?

◆『薄氷の殺人』でみたグイ・ルンメイは、アイススケート場で軽やかに滑る姿が印象的な謎の女として、怪しげなファム・ファトール(運命の女、魔性の女)ぶりを發揮していた。それから10年を経た今も若さは全然衰えていないが、クワンの妻ジョーイ役で登場した本作では、導入部でみせた美しき天才ドライバーぶりと同時に、13歳の男の子レイモンド(ワイアット・ヤング)の母親役だからビックリ!

あの極秘メールの発信者が、父親のクワンに反発する息子レイモンドだったことが判明し、クワンの怒りを買うレイモンドをジョーイが必死でかばうところから本作の本格的ストーリーが始まるに。つまり、そんなゴタゴタ状態の台北に、再びジョンが乗り込んでくるわけだ。

ホテルに入ったジョンを、クワンの部下たちが襲撃するところで起きたド派手な銃撃戦が前半の1つの見モノだが、それと共に、そこではジョンとジョーイとの間に何らかの関係があったことが暗示されるので、それに注目!すると、父親のクワンに反発し、父親に懐かないレイモンドは、ひょっとしてクワンの息子ではなく・・・?

◆私が直近に観たインド映画『私たちが光と思うすべて』(24年)は第77回カンヌ国際映画祭でグランプリを受賞し、是枝裕和監督が絶賛する作品だった。さらに新聞紙評でも好調だったが、残念ながら私にはマイマイしつくりこなかった。同じ日に観た『メルト』(23年)も「胸糞の傑作」だったから、終始イライラ。さらに『聖なる胎動』(24年)も「絶叫クイーンの誕生」には納得だが、後味のいいものではなかった。

それに比べると『エレベーション 絶滅ライン』(24年)はストーリーが単純で分かりやすく、結果も上々だった。それと同じように、本作は3人の主人公に13歳の少年レイモ

ンドを加えた 4 人のキャラクターが明確にされると、最初は真っ赤のフェラーリで、途中からは普通の車に乗り換えて、クワンの追及から逃れようとする家族 3 人（？）のアクションとロマンスが絶妙に融合されたアクションエンタメの展開になるので、ただ無心にそれを楽しむことができる。家族 3 人しばしの休息時間を過ごしたのはジョーイが生まれ育った漁村だが、そこで明かされるジョーイの出自の秘密によって、ジョーイがなぜ美しき天才ドライバーになったのかの事情に納得！さらに、レイモンドの疑問に答える形でジョーイとジョンが次々と明かしていく“秘話”の数々にも、なるほど、なるほど。

クソ難しい問題提起作もいいが、たまには頭を空っぽにしてこんなカーアクションを楽しみ、同時にそれと絶妙に融合したロマンスも楽しみたい。

◆2025 年の日本の夏も暑かったが、台北もきっと暑いはず。しかして、本作のジョージ・ホアン監督インタビューによると、「多くの人から反対されていた夏の台北での撮影」が、史上最も熱い夏の 1 つに遭遇したため、台北の街中で繰り広げられる予定だった第三幕の壮大な格闘シーンを映画館に移し、ジョンとクワンの決闘を上映中の舞台の前で繰り広げたそうだ。

観客が鑑賞中の映画は、チャン・イーモウ監督の『LOVERS』（04 年）（『シネマ 5』353 頁）だが、コトの成り行きの異様さに多くの観客は帰ってしまったものの、最後まで残った 1 組の老夫婦だけは、「今日の映画は迫力満点だったね！」と感心していたのが面白い。彼らは一体どこまで『LOVERS』のストーリーをわかっているの・・・？

そんなこんなを含めて、頭の中を空っぽにして 100 分間も楽しませてくれた本作に感謝！

2025（令和 7）年 8 月 6 日記

【追記】

私はリュック・ベッソン監督の『TAXI』シリーズが大好き。車の運転には人間の性格が「モロに出る」と言われるが、まさにその通りだ。かつて自宅から事務所まで車で通勤していた時代、毎週末とゴールデンウィーク、年末年始にはゴルフ通いをしていた時代の私の車の運転は「暴走族」に近いものだった。もちろん『TAXI』シリーズに登場するような“レース運転”をしたことは 1 度もないが、そうだからこそ余計にスクリーン上で見る『TAXI』シリーズの運転テクニックには魅了されてきた。

そんな私は、本作冒頭に見る真っ赤なフェラーリに乗ったジョーイが、台北市内を 180km/h で疾走（暴走？）する冒頭のシーンにビックリだが、それはやはり大スクリーンで観なくては！そんな夢を叶えるため（？）、私は 11/1 にわざわざ劇場に足を運び、大スクリーンで本作を再鑑賞！そこで再確認したのが、リュック・ベッソン監督の映画づくりにおけるスピード感も私の感覚にぴったりとフィットしていることだ。原題を『Weekend in Taipei』とした本作を、2025 年 11 月最初のウィークエンドに大スクリーンで鑑賞できることに感謝！

2025（令和 7）年 11 月 4 日記